

New Edition Surfing 英語 I

集中力を持続させるために スラッシュを利用した授業展開の工夫



Hamada Yoshihiro

岡山県立鴨方高等学校(現 矢掛高等学校)教諭 濱田 好宏

1. はじめに

本校(鴨方高校)は各年次4クラスの総合学科で、外国語科は常勤5名(英語)、非常勤4名(英語・スペイン語・中国語・ハングル各1名)、ALT3名(各1日)です。進路は、進学6:就職4の割合で、入学してくる生徒の学力差はかなりあります。英語が得意な生徒もいますが、中学の早い時期につまずいている生徒も多いので、授業にかなりの工夫が必要です。

最近の生徒は、ビンゴやクイズなどの楽しい活動には乗ってきますが、教材を説明的に扱うと、集中力が落ちやすく、本校においてもその傾向が年々顕著になってきました。私は語彙・文法などは、先に説明しておいたほうが、スムーズに本文に入ることができると考え、ずっと演繹的な形で授業をしていましたが、生徒の集中力をもっと引き出すことができるように授業の手順を変える必要があると感じました。そこで様々なパターンを試した結果、本文にスラッシュを入れて帰納的に文法の導入を行うと、今までよりも生徒の反応が生き生きと出てきて、集中力も持続できるようになりました。

2. 授業の手順 [次ページ「授業プリント」参照]

①本文の内容の導入:教科書の BEFORE YOU READ の写真などを使い、これから扱う内容を簡単に導入します。(必ず質問形式で始める)

②語彙の導入:本文の内容語を中心に発音や意味を導入します。(機能語は必要に応じて)

③語彙の練習→すぐ小テスト:練習用ワークシートで単語・熟語をその場で数回書かせ、小テストをします。(最近の生徒は結果が目に見える活動や作業的な活動には良く取り組む)

④本文にスラッシュ:1ページに十数カ所のスラッシュを記入します。(私はコーラスリーディ

ングで手をたたいて入れさせたりする)

⑤スラッシュ単位の和訳と全文訳:生徒に時間を与え、スラッシュ単位で自分の考えた和訳をノートに書き込ませます。(英語が苦手な生徒でも、語彙は先に覚えているのでそれを手がかりに取り組める)→スラッシュ単位に十数人を一気に指名します。→英語と和訳を板書させます。私が添削し、生徒が間違えた部分について、なぜ間違えたのかを生徒に問いかけながら、文法を説明していきます。例えば、レッスン10に、It was a question / which I could not answer. という部分があります。本校では関係代名詞を知らない生徒が多いので、後半の which を疑問詞の「どちら～」と板書します。私が「It was a question とつながらないなあ。どうして?」と質問すると、生徒は「えー!わからん」などと反応したり、他の生徒が口を出したりして、授業が活性化してきます。これが、生徒一人一人の自主的な発言の場になり、クラス全体に文法の説明を聞こうとする雰囲気生まれます。そして最後に同じ方法で全文訳をします。

ただし、この方法は文法を考えず前後関係だけで意味を想像する習慣に陥る欠点があり、間違いを犯した生徒の気持ちを傷つけない配慮も必要です。和訳を使うことについては、先生方にも賛否があると思いますが、本校の生徒には正しい日本語力を養うことも必要と考えているので、私は積極的に書かせています。

3. 英語授業のチェックリスト

最後に、自分の授業を見直すために、チェックリスト(本書p.21)を作ってみました。自分の授業や教育実習生の指導で使っています。私の経験則で作ったため理論的な裏付けはありません。皆さんの御意見をいただけたら幸いです。

【配布「授業プリント」の例】

英語 I レッスン10の3 “Can Davida live in the Jungle ?” 78-79頁

■□部分訳とポイント

① Our time at the camp / was almost up. 2

② But Davida still had / a lot to learn /---/ how to find food./ 5

3 what dangers to avoid, / and so on. 7

③ “Can Davida live in the jungle ?” / asked David. 9

④ It was a question / which I could not answer. 11

⑤ However, Dr. Galdikas said, / “Everything will be fine. / 13

12 You have helped her enough. 14

POINTS ! ①～⑤のどの文に答えがあるか番号で答えなさい。

Q : 2人がキャンプを去る前に、ダビータはひとり立ちできましたか。

A : (15)

Q : ガルディカス博士はキャンプを離れる二人に何と言いましたか。

A : (16)

■□語句	発音	ここは意味を覚える練習に使える！
01. almost	[]	
02. up	[]	
03. still	[]	
04. danger	[]	
05. avoid	[]	
06. and so on	[]	
07. however	[]	
08. enough	[]	

■□全文訳

①

②

③

④

⑤

POINTS ! 日本語できちんと答えると・・・

Q : 2人がキャンプを去る前に、ダビータはひとり立ちできましたか。

A :

Q : ガルディカス博士はキャンプを離れる二人に何と言いましたか。

A :

■□板書事項 :

《疑問詞 + to do 「疑問詞 do するべきか」》

① Do you know what to do next ? → 「]

② Do you know when to start ? → 「]

③ Do you know where to go now ? → 「]

④ Do you know how to do it ? → 「]

《関係代名詞の目的格の用法》

⑤ Which do you like better, coffee or tea ? → 「]

⑥ Can you see the dog which is under the tree ? → 「]

⑦ This is the jacket which I bought yesterday. → 「]

英語授業のチェックリスト 何に重点を置くか。意識できた項目にレ。

by Hamada

《授業の始まり》

- 時間どおりに授業を始める。
(これができないと生徒にも要求できない)
- 機嫌良く教室に入り機嫌よく授業を始める。
(人間の第一印象は最初の1分で決まる)
- 黒板・電灯・窓やドアなど学習環境を整える。
(集中力がかなり違う)
- 生徒に机上への教材準備の指導をしておく。
(授業時間を稼ぐことができる)
- 生徒の授業を受ける態度の指導をしておく。
(特に教材忘れと遅刻の指導内容は決めておく)

《導入・展開・復習の技術》

- 授業のねらいや内容の予告をする。
(全体の中で今どの位置にいるか)
- 導入にインパクトがある。
(驚き・新鮮・身の回りの話・板書・実物・・・)
- 導入にスピードがある。
(生徒の集中力は新情報か変化かスピード)
- 生徒や教師や身の回りの情報からスタート。
(英語教育の基本である)
- 具体例や状況設定など言語使用の場面を作る。
(役に立つと言う実感・イラストが便利)
- 比較・類似・反対・既知との比較をする
(新しい概念はすぐに頭に入らない)
- 同時に2つ以上の変化や活動をさせない。
(生徒のレベルにもよるが集中力は1ヶ所に)
- 帰納法か演繹法かを常に意識する。
(易→帰納法・難→演繹法が基本だが崩すことも)
- 認識・理解・定着・選択・使用の区別をする。
(各活動にねらいがあるか)
- information gap を意識した活動をする。
(生徒の興味と状況設定)
- 活動のねらいと方法は単純でわかりやすい。
(ねらいが抽象的で活動も複雑では×)
- 最大限の生徒に最大限の時間の活動をさせる。
(教師の活動は最小限に)
- 個人・グループ・クラスなど活動の単位を考える。
(必要な場合で良い)
- 後で生徒が自分で復習できるようにしている
(授業後にノートに何が残っているのか)
- 辞書を使う。
(毎時間は苦しいが努力する)
- 計画通りに進まない時の対応を考える。
(要は何を捨てて何を残すか)
- 導入・展開・復習などの構成がある。
(必要に応じて良い)
- 授業に山がある。
(何を捨ててもここだけは残したい部分は?)
- ポイント学習になっている。
(最後に生徒の記憶に残っているものは?)
- 文法用語・和訳・形式・機能を区別して教える。
(文法用語を叫んで和訳したら終わりではない)

《退屈しない授業の要素》

- ◎ 変化 ◎ 新情報 ◎ 体験 ◎ つながり ◎ 既知→未知 ◎ 自分で判断 ◎ 新しい状況での使用
- ◎ 自分と関係ある。 ◎ 手先を動かす。 ◎ たくさんの易しいものと少しの難しいもの

* 多くの項目を実行しようと考えれば、かえって授業が難しくなる。1つか2つを目標にする。

《教師としての資質》

- 声の大きさは十分である。
- 話すスピードはゆっくりである。
- 強調するための話し方ができる。速遅大小高低。
- 英語に関係ある雑談ができる。
- 授業に関係ない雑談ができる。
- 生徒の方向を向いて授業をしている。黒板手元×。
- 叱る時に感情的になってもすぐに平常心にもどる。
- 教科としてのねらい以外にメッセージがある。
- 小学生でもわかることばを使う。
- 当てる時に生徒の名前を呼ぶ。
- はっきりと言い切る。
- 生徒のレベルと教師のレベルの使い分けをする。
- 英語の発音が良い。少なくとも元気は良い。

《細かい技術》

- 生徒が何をしたらよいかわかりやすい板書である。
(ノートに書くものか教師の落書きか)
- 当てる生徒の位置と教師の位置を意識している。
(教室内での対角線を意識する)
- 生徒の発言や活動をすぐに評価する。
(こうしたらもっとよくなる的に)
- 質問に答えられない場合の補助質問を準備する。
(小さいステップ・類似・反対・2択)
- Classroom English を使う。
(日本語と同時並行でもよい)
- 同時に2つの活動はしない。
(最近の生徒は書きながら他のことはできない)
- 活動の切り替え時の指示は素早く出す。
(ここで生徒は集中力が切れ雑談を始めるかも)
- 今は何をやる時か明確に指示する。
(理解する時か書く時か考える時か)
- 活動を指示していない生徒への指示をする。
(1人の生徒を当てているとき他の生徒は?)
- 教師の説明は最小限にする。
(説明のかわりに質問をする)
- 口頭の説明に頼らないで説明する。
(ことばによる情報は20%にすぎない)
- 文法用語に頼らない説明ができる。
(英語そのものと状況と機能でわからせる)
- 同じ種類の活動を長時間しない。
(頭や体の使う部分と長い活動短い活動)
- 締め切り効果
(時間を予告し区切る)

《主観的な感想》

- レディネス
- 生徒は授業を聞いていたか。
- 教師の指示に従っていたか。
- 時間が短く感じたか。
- 楽しく感じたか。
- 将来役に立つと感じたか。
- 教師の情熱や人間味を感じたか。